

平成21年度

人権作品市長賞

市では、市民の皆さんの人権問題に対する関心を深め、人権意識の高揚を図ることを目的として人権作品（作文・ポスター・標語）を募集し、総応募点数16875点の中から、市長賞・優秀賞・入選作品を決定しました。

ここでは、市長賞を受賞された皆さんの作品を紹介しています。

■作文

《小学生の部》

「わたしの弟」

友生小学校6年

藤井はるかさん

あなただったら、もし、町でハミングしながらスキップしているめがねをかけた少年を見かけたらどう思いますか。私の弟は、プラダー・ウィリー症候群です。少し脳の発達がおそくて、気持ちが悪く伝えられずにすぐに泣いてしまったり、また、食べ物を食べすぎてしまつて、もつともつと食べたいという気持ちになつたりします。急に、歌を歌い出すこともあります。

弟は、近所の子から、からかわれたことが何度かあります。でも、私は、「これが私の弟らしさ。弟が弟であるあかしなんだ。」と思っていました。でも、何か言われている弟を見るとやはり気がすみません。「何か行動を起こしたい。」と思い、五年生の秋、私は弟のことをクラスの人々に話しました。先生からの、「なあ、はるか。はるかの思っていることをみんなに話してみてくれへんか。」という一言に、私は背中をおしてもらつたような気がしました。いざ、話すとなると、私は大変悩みました。みんなに全部話してしまうと、弟が

入学してきた時、何か言われないうか、あの子の弟はおかしいなんて思われないうかとか心配になりました。でも、私は覚悟を決めました。「みんなに知ってもらふことで、何かが変わるかもしれない。わかつてもらえるまで、何度でも言っていこう。私は弟のことが大好きなんだから。」

と思い、私はみんなに話しました。プラダー・ウィリー症候群のことも、弟のことも、私の思ってきたことも。今までに、人に話したことのない、一人でせおつてきた部分もすべてを話しました。最後に私は言いました。「どんな個性があつても、私の弟は、自まんの弟です。」と。そのとたん、みんなが拍手をしてくれました。心がふわっと軽くなつて、今まで体験したことのないような安心感がありました。その後の質問タイムでは、みんながたくさんの質問をしてくれました。

「なぜ、このことを話そうと思ったんですか。」

「私は、まず、弟のことをみんなに知ってもらいたかったからです。」

「プラダー・ウィリー症候群は治るのですか。」

「今は、まだ治りませんが、私は治す方法を考えたいなと思っています。」

質問に私が答えたあと、こんなアドバイスをもらいました。「今度からは、一人でかえこまずに何でも相談してね。」私は、

「ありがとう。」

と答え、とてもうれしくて、涙が出そうになりました。この時、私は、本当に話してよかった。私の思いを受け止めてくれる仲間がいてよかったと心から思いました。

六年生になり、弟が入学してきました。春の遠足では、弟は私の友だちとペアになり、仲良く手をつないで歩いていました。弟と友だちは、お弁当のときおかずの交換をしたそう、そのことを後で友だちから聞いて、私は思わず笑ってしまいました。弟らしいなあと思ったからです。また、休み時間には、弟はよく、六年教室へやってきました。そんな時友だちは、ろう下を手をつないで歩いたり、おんぶしたりしてくれて、私は弟の笑顔を見て、とても幸せな気持ちになりました。私は、

クラスのみんなに私の思いを言つてよかったと改めて思いました。

私には、将来の夢がありません。それは、薬剤師になることです。自分で薬を作つて、病気を治す仕事をしたからです。病気の人も家族も、その人の友だちも幸せになつてほしいです。この大きな夢に向かってすすんでいきたいです。こんな気持ちになれたのは弟のおかげかもしれません。

私の弟の名前は「新」といいます。名前には、どんな新しいことにチャレンジする子にという願いがこめられています。願いがかなつていないかどうかわかりませんが、弟は、新しいものが大好きになりました。いろいろなことができるようになってくれ、私はとてもうれしいです。これからも、クラスのみんなや家族、たくさんの人たちに支えられながら、いろいろなことにチャレンジしていつてほしいと願っています。弟の笑顔は、私を幸せな気持ちにしてくれます。弟の笑顔が大好きです。

私の弟は、自まんの弟です。

「私にできること」

崇広中学校2年

西出 菜摘さん

私は、小学校のときから「部落差別」という言葉を知っています。六年生のときに、先生から意味を聞きました。「部落差別」とは、住んでいるところで人を差別することです。

私の住んでいるところを「部落差別」する人がいます。でも小学生のときは「自分は差別されてないから、直接関係ないな。」と思っていました。中学校に入学してからも、私には関係ないと思っていました。

私は小学校のときから「地区学習会」に参加しています。地区学習会では、差別をなくするための勉強、教科の勉強などをしています。仲間といっしょにするいろんな行事もあります。私はたまに行くくらいで、積極的に参加しているとはいえませんでした。でも、同じ地区の友達の、強い思いと言葉で、今では必ず行くようになりました。

その友達は「部落についてもっと勉強したい。部落差別がなんであるのかわからないけど、絶対におかしいこの部落差別をなくすために、何かやっていきたい。」と言いました。そのときに私も「自分の住んでる町だから、もっと部落について勉強したい、知りたい。」と思いました。

それから、積極的に地区学習会に行ったり、校内ヒューマンライツに参加したりするようにになりました。

部落差別について、真剣に考える先生にも出会いました。その先生と、別の地区の発表会を見に行ったりしました。どの場面から「部落差別はあかん。なくしていききたい。」という思いがいつばい伝わってきました。

でもどうやってなくしたらいいのか分かりません。「部落差別は、ほんとうになくなるのか」という思いもありました。だけど私は、「部落差別という言葉を知ってもらおう。意味を知ってもらおう」というところから始めました。

中一のとき「山なみ学習」という人権の授業で、クラスの子に「私の住んでいる町を差別する人がいます。」と言

いました。「知らん顔せずにはまず部落差別のことをいっしょに考えてくれたらそれでもいい。」と伝えました。私は、多分みんな軽い気持ちで考えていると思っていました。でも、私の心配とは逆で、みんな真剣に考えてくれていました。

「地区学って、そういうことを勉強してるんや。」とわかってもらえたり「ありえない差別や。」とか「小学校の集いのときは、なんとなく話に入りこめなかったけど、今ならいけそう。」と、想像以上の答えが返ってきたので、とても嬉しかったです。これからは、もっともつとたくさんの人に伝えて行きたいです。

まずは崇広中学校のみんなに広めていって、ほかの中学校・高校などにも伝えていけたらと思っています。みんなが発信することで、少しずつでも部落差別がなくなればいいなあと 생각합니다。部落差別をなくそうとしていくことは、ほかの差別もなくなることにきつとつながると思います。

私はまだまだ知らないことがいっぱいあります。なので、

これからもずっと積極的に地区学と、校内ヒューマンライツに参加します。

校内ヒューマンライツでは今、11月に行われるヒューマンフェスタのことをいろいろ考えています。人権を大切に、人と人がつながるためのイベントです。「どうしたらいっぱい人が来てくれるのだろうか。」とか「みんなに楽しんでもらうには、私たちが何ができるのだろうか。」「幼い子どもたちが来てくれたらどうやってもてなそうかな、風船のプレゼントがいいかな。」などと考えています。

私は「ミサンガ」を提案しました。ミサンガは「プロミスリング」とも言われるように、願いごとをかなえるために、手首などに巻くもので、子どもから大人、おじいちゃん、おばあちゃんまで、だれでも身につけられるからです。ミサンガは自分たちで作りました。みんなが声をかけ合って作りました。想像以上にたくさんでき上がっていて、当日が楽しみです。私は「部落差別なんてありえない！絶対に部落差別をなくすんだ」と思いながらミサンガを編みました。「いじめで泣

く人がいなくなるように。」「やさしい言葉で教室がいっぱいになるように。」みんな思いをこめて一生懸命編んだので、この思いがたくさんの人に伝わればいいです。ミサンガ作りに協力してくれた人、ほんとうに感謝しています。

ミサンガをつけていると、みんながつながっていく感じがしてきます。小さかった輪が少しずつ大きな輪になっていると思います。私はこれからもずっとこの輪を広げていきたいです。

差別がなくなることを信じて、これからも「私にできること」をやっていきます。

